The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

日記にみる児童のことばの発達

お茶の水女子大学附属小学校　村上　博之

キーワード：言語発達、概念語彙（漢語）、語彙指導、帰国児童、日記、データベース

1　研究の目的

ある言語を母語として習得できる境界線が、10歳前後にあると言われている。

このことは、この時期にあたる小学校4～5年生の児童が用いる「ことば」が、日常的なものから、抽象的なものへと変わっていく様子が観察できることからも窺い知ることができる。

そこで、一人の児童が具体的にどのような「ことば」を獲得していったのかを分析することを通して、その発達構造を明らかにするための手がかりを得たい。また、その成果を踏まえて、言語指導のあり方を模索したいと考えた。

2　研究の方法

2.1　研究の対象

分析するための材料として、私が二年間にわたって担任した帰国児童のK君が、4～5年生の間、毎日書き続けた「日記」を取り上げることにした。その理由は、以下の通りである。

①「ことば」の獲得が短期間に行われており、日々の成長が捉えやすい。

②日本での学校生活の経験がないため、学校用語の習得過程が見えやすい。

③同時期に行われた「語彙調査」の先行研究データが援用できる。

2.2　具体的な研究方法

日記に示された「ことば（語彙）」を文節単位で品詞分類し、そのデータをコンピュータに入力して、統計的な処理を行うためのデータベースを作成する。

次に、そのデータベースを用いて、以下の手順で、「ことば」の使用状況についての分析を行い、対象とした児童の発達過程について考察を加えていく。

(1)使用された語彙の種類数の変化

(2)品詞ごとの語彙の使用割合の変化

(3)品詞ごとの語彙の使用状況の特徴

①使用数の多い語彙の状況や特徴

②使用数の少ない語彙の状況や特徴

③特徴的な語彙の使用状況　　など

3　研究の成果

3.1　語彙の獲得状況（種類数の変化）

作成した「語彙データベース」は、二年間の日記24冊（計703日分）を対象とし、全体の総数（のべ数）は53034語。

この中に用いられている「ことば」の種類数（初出語数）は6797語であった。

初出語（初めて用いられた語彙）の数量が時間とともに増えていく様子を見る限りにおいて、この児童の語彙獲得が確実に、また、ほぼ一定のペースで進んでいったことが確認できた。

3.2　使用語彙の品詞別割合

全体の総数に占める各品詞の割合、日記1冊ごとの種類数（異なり語数）における各品詞の平均割合、初出語数における各品詞の割合は、それぞれ次のような結果になった。

（品　詞	：総　数	：異なり	：初出語）
名　　詞	：46.8%	：59.8%	：70.7%
動　　詞	：32.3%	：19.9%	：13.8%
副　　詞	：6.1%	：7.3%	：5.0%
形 容 詞	：4.1%	：4.1%	：2.1%
形容動詞	：2.0%	：3.2%	：2.4%
代 名 詞	：4.5%	：1.5%	：0.5%
連 体 詞	：1.6%	：1.1%	：0.3%
接 続 詞	：1.6%	：1.7%	：0.7%
感 動 詞	：0.3%	：0.6%	：0.8%

この結果から、新たに獲得される語彙の割合は、名詞が7割を占めるようになることや、品詞によって獲得される時期に違いが見られることが分かった。

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

3.3 品詞ごとの語彙の使用状況や特徴

(1) 代名詞・連体詞

代名詞の総数（のべ数）は 2417、それに対する初出語数は 31 語しかない。同様に、連体詞の総数は 844、対する初出語数は 17 と極めて少ない。また、4 冊目の日記までにほとんどの語彙が初出語として現出している。

これらの事実から、この 2 つの品詞は、すでにある一定の種類数の語彙が獲得されており、新たな語彙の習得に関しては、ほぼ飽和状態に達していたのではないかと思われる。つまり、日常的に用いられる代名詞・連体詞のほとんどが、小学校 4 年生のこの段階までに獲得される可能性が高いと考えられる。

具体的に代名詞の各語彙を見てみると、この日記の主体者である「ぼく」という語彙が、1327 回（54.9%）用いられており、「**ぼくたち**」「**ぼくら**」を合わせると、実に代名詞全体の 62.3%をも占めることが明らかになった。また、「それ」「これ」「みんな」などの語彙の使用数は全体を通してあまり変化していないにも関わらず、「ぼく」の使用数は大きく減少していったことが分かった。

文章の構成として、自分が見たこと行ったことなどを羅列的に並べるのではなく、より関連づけられたまとまりのある文章を書くようになっていったこと、また、自分を中心とした主観的な記述から、社会性・客観性を帯びた記述をするようになっていったこと、などが考察できる。

(2) 形容詞・副詞・形容動詞

形容詞の総数は 2181、それに対する初出語数は 143 とやや少ない。
副詞の総数は 3226、それに対する初出語数は 340 と約 1 割程度にまで及ぶ。さらに、形容動詞は、総数は 1102 ながら、それに対する初出語数は 165 とかなり多くなっている。

形容詞、**副詞**、**形容動詞**は、いずれも修飾する働きを持った品詞であり、わずかながら初出語の現出が最後まで見られる点などで、共通した傾向を示している。しかし、最初の日記における現出割合を見ると、形容詞が最も高く、次いで形容動詞、副詞の順に小さくなっている。

これは、それぞれの品詞の持つ性質の違いを示していると考えられるが、副詞よりも形容動詞が、形容動詞よりも形容詞の方が、すでに保有していたか、または、早期に獲得される割合が高い品詞であると考えることができる。

副詞の初出語全 340 種類の中で、「限定語（1 回しか用いられない語彙）」の数が 151 語(44.4%)もあり、その中の 89 語（58.9%）が「オノマトペ（擬音語や擬態語）」であった。つまり、このオノマトペの存在が、副詞の持つ性質を特徴づけていることが分かった。

一方、形容動詞の初出語全 165 種類の中で、「限定語」の数は 77 語(47.5%)と、副詞を上回る割合を占めており、新たな語彙の獲得割合は副詞に及ばないものの、その獲得が副詞よりも早いペースで進んでいくことが明らかとなった。

この限定語は、「他の語彙では表すことができない何かを表現するために用いられた可能性が高い語彙」である。そこで異なり語数に減少傾向がはっきりと示されるようになった、13 冊目以降の日記に現出する限定語に着目してみると、43 例中 11 例に「～的」という語彙が現出していることに特徴が見出せた。

これらの用例を分析した結果、次のような段階を経ていることが考察された。

①聞きかじったばかりのことばを、試しに使ってみた段階

②周囲の人間が用いていることばを感覚的に受け止め、借用している段階

③経験的な判断から、適切な修飾語として文脈に当てはめて用いている段階

④それによって表される多くのことば（概念）をまとめて獲得・拡充している段階

(3) 動詞・名詞

動詞と**名詞**を比べると、早期の現出割合は動詞が若干高い。しかし、4 冊目以降の日記では、いずも安定した現出状況

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

を示している。のべ数の違いが大きいため初出語数に開きがあるが、いずれも同様の傾向を持っていると考えられる。

①動詞

動詞の総数は 17056、対する初出語数は、941 と極めて少なく反復回数がかなり高い。異なり語数では、連体詞を上回っていたが、のべ数全体で見た場合には連体詞の 49.6 回を大きく下回っている。

つまり、連体詞は種類数が少なく、日記ごとに同じ語を重複して用いているのに対して、動詞の場合は日記ごとに用いられている種類が異なっていることを意味しており、他の品詞には見られない際だった特徴を指摘できる。

各語彙ののべ数に着目すると、その半分以上が「いる」「する」などの 10 語で占められており、逆に限定語も、395 語(42.0%)に及んでいる。つまり、動詞は、少数の反復回数の高い語彙と、多くの限定語とを併せ持った品詞であるということが分かった。

動詞の限定語及び、使用数が少ない語彙の中にあって特徴的なのは、複合型の動詞や「サ変動詞」によって造られた語彙の多さである。

特に、「調節する」などの「漢語系（漢語＋する)」の「サ変動詞」の割合が、「チャレンジする」などの「外来語系（外来語＋する)」の動詞と比べても、徐々に増加する傾向を示していることが分かった。

②名詞

名詞の総数は 23164、対する初出語数は、4803 と極めて多い。また、限定語の数は、2306 語（48.0%）と約半数を占めており、極めて限られた場面に用いられる語彙の割合が大きいという、名詞の持つ特徴が明らかとなった。

名詞は、文の主語となるという性質上、書き表そうとする文章内容と深い関わりを持たざるを得ないために、テーマや文種によって、用いられる語彙に偏りを生じさせやすいことが確認された。

逆に、特徴的な語彙が反復されて用いられる時期や状況などに着目することによって、その児童の興味・関心の向けられている対象が明らかになったり、意識の変化を読み取ることも可能となることが分かった。

また、「文章の書き出しを工夫する」という学習を行った後、日記の書き出しに「今日」という語彙を用いることがなくなったり、諺の学習後、進んで諺や慣用句を用いたりするようになるなど、文章表現の学習状況も伺うことができた。

(4) 接続詞・感動詞・その他

接続詞の総数は 817、対する初出語数は 47 とかなり少なく、初出語の現れ方にばらつきが大きい点に特徴が見られる。

このように、現れ方に一貫性が見られず、その時々に応じて不規則に現出する傾向は、感動詞などの品詞にもみられるが、接続詞の場合は、その時々に偶発的に現出する可能性よりは、何らかの意識の変化による可能性が高いと考えられる。

例えば、最も頻度数の多かった「でも」の使用割合が徐々に減少し、16 冊目の日記から新たな逆接の接続詞として「しかし」が現出したことなどは、論理的な思考を行うようになってきた結果、必然的に用いられるようになったと考察できる。

4 研究のまとめ

4.1 語彙獲得の実態から

新たな語彙は、初めて体験した事柄を説明する必要性が生まれた時や、より深い心情を表現したいと思った時などに、意識的・無意識的に、主として自分が見知っていた語群の中から選択されて現出するものと考えられる。

また、新たな語彙の獲得においては、その語彙の意味や用法が分かっても十分ではなく、それをどのように用いるかに熟知して行かなければ、表現語彙として定着しにくいものと考察される。

他の語彙では表すことができない「何か」を表現するために、新たな語彙が用いられる場合もある。「～的」と表現される語彙などはその典型と思われるが、この場合もしばらくの習熟期間が必要であ

NII-Electronic Library Service

The National Association of College Teachers for Japanese Language and Literature Education

り、①聞きかじったばかりのことばを、試しに使ってみた段階～④それによって表される多くのことば（概念）をまとめて獲得・拡充している段階を迎えるものと考察できる。

さらに、「～的」で示されているのは、それまでの日常目にする事象を説明する語彙とは異なり、抽象的な性質である点も重要である。つまり、漢語に代表されるような「概念的・抽象的な語彙」の獲得においては、このような道筋をとるものと考えられるからである。また、これらの語彙は「限定語」の中に多く見られたが、漢語の獲得・拡充に伴って、今後さらに発展的に用いられる可能性が高いと考えられる。

動詞でも同様に「漢語＋する」型の語彙の増加が見られたが、1つの「漢語＋する」の語彙の背景には、「対概念となる語彙」が存在し、「名詞や形容動詞」としての発展性や、「元となる概念語彙に対する深い理解と習熟」の可能性などが想定される。

したがって、これらの新たな語彙の使用状況を系統的に整理・分析し、獲得の道筋を明らかにできれば、思考の発達に伴う言語獲得のメカニズムをより詳細に検証することができると思われる。

4.2　語彙獲得における有機的関連性

新たな語彙は、「他の言葉ではうまく表現できない、抽象的な性質を表現するため」に必要とされたり、修飾語の獲得がある一定量に達し、さらなる派生的な表現が求められたりする過程で、限定的に用いられて現出することが分かった。

しかし、これらの語彙の獲得は、品詞ごとにのみ発達するだけではない。

例えば、形容詞に「ものすごい」や「真ん丸い」など、程度を強調するための語彙が用いられ始めた時期（№6）に、形容動詞に、「真っ青」「真ん丸な」といった語彙が現出したり、「～っぽい」という語彙を用い始めた時期（№14）を同じくして、形容動詞に「～的」という語彙群が現出したりするなど、形容詞と形容動詞の間に共通性が見出された。

また、「オノマトペを多用する段階」にあったと思われるK君が、「陳述の副詞」を用いるようになった時期に、「しかし」という接続詞が現出（№17）するなど、品詞ごとに見られる変化には、横の連関を見出せることも分かってきた。

同様に、「今日」の書き出しが減少することによって、用いられる語彙が変化していくなど、文章発達の状況もまた、語彙の使用状況と密接な関わりを持っていること、さらに、日記内容から見出された様々な意識の変化もまた、こうした新たな語彙の獲得や文章発達などとの間に密接な関係を持っていることなどが、明らかになってきた。

5　今後の課題

①ひらがなから漢字への移行や、系統的な発達事例など、漢語を中心に概念獲得の道筋を明らかにする。

②語彙的側面から得られた観点をもとに、日記内容の詳細な分析・検証を行う。

③言語獲得の背景にあった学習環境を、授業記録などを用いて立体構造化する。

④総合学習と言語獲得との関わりについて、具体的に検証する。

⑤日記指導のあり方も含め、個に応じた言語指導の実践的な指標の開発を行う。

⑥比較データとして一般児童の日記分析を行い、分析観点の妥当性を検証する。

⑦他の言語発達研究との照合を行う。

参考文献

・成田信子・宗我部善則・田中美也子（1995）「作文能力発達に関する縦断的研究その一」『国語科教育』42

・田中美也子・村上(1997)「作文能力発達に関する縦断的研究その二」『国語科教育』44

・藤原与一(1975)『小学生児童作文能力の発達』文化評論社

・国立国語研究所（1990）『語彙の研究と教育（上・下）』　大蔵省印刷局

・村上（2000）「小学生の思考発達と言語指導の研究」(平成12年度鳴門教育大学大学院学校教育研究科修士論文)　　ほか

NII-Electronic Library Service